BROADCASTING CREATOR'S ASSOCIATION

放送人の会

会報 No 11
2002.5.1 発行

〒102－0094 千代田区紀尾井町1－1 千代田放送会館3階
TEL & fax 03－3221－0019
E-mail hosojin@abeam.ocn.ne.jp
代表幹事 大山勝美

2002放送人グランプリ決定

2002放送人グランプリと特別賞、特別功労賞が決まった。表彰式は五月十一日で、受賞者には沖縄在住のガラス工芸作家末吉清一氏が制作した沖縄ガラスのトロフィーが贈られる。

【グランプリ】
曽根英二 氏（山陽放送報道部長）

香川県豊島の産業廃棄物問題などの報道活動・番組制作活動の継続的努力と成果、さらに、2001年のドキュメンタリー「島の墓標」のすぐれた構成・演出など、時代の中の放送人のあり方に常に前向きの挑戦を続けたことに対して

【特別賞】
故・萩元晴彦 氏
（テレビプロデューサー）

テレビマンユニオンの初代社長として「オーケストラがやってきた」などの良質番組制作に意欲と工夫を凝らし続けた実績と、サントリーホールやカザルスホールのプロデューサーとして音楽分野での成果、常に放送界へ刺激を与え続けた意欲的な姿勢に対して

石橋 冠 氏（テレビ演出家）

日本テレビ在籍時代からフリー演出家の時代を通して、「池中玄太八〇キロ」「角筈にて」「玩具の神様」など、良質なテレビドラマの演出に対する継続的努力と成果に対して。また、2001年の「張り込み」のすぐれた演出に対して

【特別功労賞】
梅棹忠夫 氏
（国立民族学博物館初代館長）

「放送人」という言葉を生み出し、「放送人」という職業集団の文化的可能性について論じた40年前の先駆的な指摘が持つ今日的な大きさと深さに対して、同時に、ビデオテークの先駆的活動でアーカイブの文化的意味と必要性を唱導実践したことに対して

放送人・グランプリ受賞について

山陽放送 曽根英二

1990から香川県豊島（てしま）の産廃問題を継続報道しています。「こんなにも闘った島があるだろうか」「こんなにも行政は住民の側を向かないものだろうか」とも思っています。

全国最悪の産廃の不法投棄に「元のきれいな島を返して」と立ち上がり、ついには、行政を変えさせようと自ら政治に参加する「自立の民主主義」の闘いにまでたどりついた豊島の住民たちでした。

「草の根の闘い」が行政を追い込んでいきました。その一方で闘い半ばで多くの島民が亡くなりました。ドキュメンタリー「島の墓標」は、四半世紀におよぶ、ごく普通の人たちの過酷な闘いと、その意味合いを描いたものです。

「筑紫哲也ニュース23」とタッグを組んで放送した特集は、90 年以来豊島からの全枠中継を含めて 15 回。ドキュメンタリーも今回の「島の墓標」まで6本を数えます。豊島の人たちの生き様が全国に勇気を与えているのも事実です。2000 年 6 月に香川県知事が謝罪して、公費による産廃の撤去に向けて動き出している豊島は、島をどう再生するかでもがいています。

テレビに身をおく者として「放送人の会」から賞をいただけるのはまことに光栄です。「志」「現場」「普通の人の目線」を大切に、今後とも、テレビジャーナリストとして、優しさや、怒りをもった放送を続けたいと思っております。

【受賞の言葉】

第一回放送人グランプリ特別功労賞をいただくことになり、まことに光栄なことと存じます。わたしのように現実の放送界からとおい人間が、このような栄誉をうけてよいものかどうか、とまどいを禁じえません。

ふりかえってみますと、わたしが放送をふくむ情報産業の大発展を予想し、期待する論文を発表しましたのは、四〇年もまえのことです。そのあいだの情報産業とくに放送界の発展と放送人の成長のめざましさをおもうと、まったく夢のようです。二一世紀にはいって、放送人という職業集団のますますの繁栄が予想されます。かがやかしい未来が放送人の前途にひらけつづけることをおいのりしております。

梅棹　忠夫
（国立民族学博物館顧問）

・放送人の証言　進捗状況・
現在企画・取材中の証言者は
・小川秀夫氏・荻野慶人氏・山本隆則氏・堀江史朗氏です。
（久野浩平）

～イベント企画～

ローカルの知恵は無尽蔵！

全国〝ふだんの番組〟フォーラム２００２年

主催　放送人の会
後援　民放連・ＮＨＫ・放送番組センター・全日本テレビ番組製作社連盟

〝デジタル化革命〟をめぐる経営論・番組制作論は、衛星放送とキー局発の番組を軸に展開されています。他方、ローカルの番組は、全国ネットの場が限られ、ローカルの役割をめぐる論議は極めて乏しいのが実情です。しかし全国各地での放送映像祭への参加作品と「放送人の会」の調査の範囲でも、それぞれの地域で強い支持を得ながら、全国の視聴者がその魅力に触れる機会のない番組は無尽蔵といっていいほど豊富です。こうした地域に向けた番組のもつ多彩な力は、今後の全国の制作者相互を励ますだけでなく、21世紀の地上放送の視聴者の利益と放送の役割を考える基礎と考えられます。

このフォーラムは、こうした全国の民放、ＮＨＫによる各地域に向けたあらゆる番組の中、特に日常的に影響力を発揮している番組、つまりレギュラー番組、レギュラーイベント、継続的シリーズ企画などに注目します。全国の番組制作者、放送事業関係者、広告関係者、ジャーナリストが一堂に集まり、これらローカルの〝ふだんの番組〟の最良の到達点を実際に観ることによって、現在、ローカル番組の生み出している力を再評価・再発見したいと考えます。

【企画協力】浜本孝久（北海道テレビ社長）片桐松樹（仙台放送社長）北川信（テレビ新潟社長）平岡昇（富山テレビ会長）金井宏一郎（中国放送社長）

【会場】財団法人放送番組センター（横浜市中区日本大通11番地　横浜情報文化センター）

【開催日時】7月16日（火曜日）午前10時～午後5時

【事前のアンケート】各社の自社編成、自社制作の番組の中で、視聴者の支持の強いものを一つ以上ノミネートし、その内容を配布アンケート用紙に記入、ご送付して頂きます。当日配布の資料とします。

【第1回フォーラムの構成】

1、〝ふだんの番組〟の全国的現状をアンケートと作品で報告。（事例の紹介予定＝北海道テレビ、山梨放送、北日本放送、鹿児島テレビ他）

2、番組を語る
熊本放送「ばってん荒川・太田黒浩・熱血ジャゴー一座　只今参上」（熊本放送・村上雅通プロデューサー）

3、番組を演じる
福井テレビジョン「越前若狭見廻り奉行　俵太の達者でござる」（越前屋俵太、酒井美樹雄プロデューサー）

4、コメント
土屋敏男（日本テレビ編成部長）澤田隆治（放送人の会）清水東（作家「お江戸でござる」）碓井広義・田中直人（テレビマン・ユニオン）石川弘義（関東学院大学教授）北川信（テレビ新潟社長）他

【参加費】一人・2万円

【展示】番組センター所蔵の作品とともに、草創期の第一人者津瀬宏氏による保存台本の特別展示を行います。

【懇親会】
情報文化センター内・レストラン「アルテ・リーベ」にて。午後5時半～7時。会費3千円。

【企画】澤田隆治、松尾羊一、石井清司、鈴木典之、〈総合プロデューサー〉田原茂行

▽　△

従来、イベントやフォーラムは、制度論や報道やドキュメント、ドラマ分野に傾斜しがちで、肝心の娯楽、広くテレビ大衆芸能の領域について語ることは以外に少なかった。これを機会に中央と地方を超えた風土に根差した放送娯楽を考えてみたい

以下は別便で会員の皆様にお届けしようと準備したものですが、タイミングが会報発行と同時になってしまいましたので、会報の中に収録しました。

幹事会報告　No 1

■「放送人グランプリ」

放送人の会では今年度から「放送人が選ぶ放送人の賞」として「放送人グランプリ」を選定することにし、準備を進めて来ました。選考委員は委員長に川口幹夫氏、委員に久野浩平、岡崎栄、吉村育夫、磯野恭子の各氏にお願いしました。会員の多くの方から候補の投票があり、選考委員会は選考に当たって以下の原則を確認しました。

①「２００２放送人グランプリ」だから、２００１年に著しい業績をあげた人に
②番組か個人かというと個人に限ろう
③会員で候補がいるが、会の立ち上げに尽力した人や主要な役回りの人は１回目は避けよう
④長期の貢献は特別賞を考えよう
⑤特別賞は亡くなったひとでもいい。とりあえず２～３人、ユニークな賞にしよう

以上の原則で、投票を勘案してグランプリの候補は①今井彰（ＮＨＫ・「プロジェクトＸ」）　②佐藤幹夫（ＮＨＫ・「聖徳太子」）　③曽根英二（ＲＳＫ・「豊島のドキュメンタリー」）の３人に絞られました。そして選考委員会で話し合った結果、①は既に多くの受賞歴がある　②は評価が分かれ　③に落ち着きました。

特別賞は長年の貢献に対してという意味合いから、グランプリ候補者をスライドさせることは止めようということになりました。会員の投票も久米宏から故高橋圭三氏まで多彩。故人では石川一彦氏、河野宏氏もありました。

話し合いの結果　①故　萩元晴彦氏…プロダクションの草分けでテレビマンユニオンを創立、以降ユニークな活動、特に音楽プロデューサーとして実績が高かった。②は、会員投票でも多かった石橋冠さん…円熟した大人の演出（「張り込み」など）に対して　　の２人に決まりました。

なお第１回なので、われわれにとって特別の意味のある賞をと考えた結果、「放送人」という言葉を創出された梅棹忠夫氏に特別功労賞を贈ることにしました。

賞は５月８日に放送記者クラブで発表し、５月１１日（土曜）の総会の席で副賞と一緒に贈られます。

賞の選定にあたってはは会員の方の投票が大変力になり、参考になりました。ご協力に感謝します。

■幹事改選　新人10人が登場

２年前、大山勝美代表幹事のもと 30 人の幹事団が決まり、事業の推進に当たってきました。会則では任期は２年。改選の時期を迎え、幹事会では通常の選挙制でゆくか、それとも推薦制でゆくか議論を繰り返し、結局折衷案のかたちで全会員に推薦（自薦・他薦）投票をしてもらうことになりました。

回答者は 70 人。これまでにない高回答率でした。そして推薦された人の数は１０１人。会員の半数がノミネートされたわけです。推薦票が多かった順にリストを作り、諾否をお聞きして 30 人の新幹事候補者が決まりました。うち地域幹事はすべて再任（予定）。新しい幹事は加賀美幸子さんはじめ 10 人。引き続いての幹事が 12 人という内訳です。

幹事候補者は以下の通りです。

石高健次　石橋　冠　磯野恭子☆　北川　信☆　木村栄文☆　木村成忠☆　今野　勉　斉明寺以玖子
澤田隆治　鈴木昭典☆　田原茂行　中村耕治☆　野崎　茂　久野浩平　備前島文夫☆　堀川とんこう
松尾羊一　村上雅通☆　村木良彦　大山勝美　　迫田朋子○　石井清司○　伊藤雅浩○　各務　孝○
明神　正○　荻野慶人○　山田良明○　加賀美幸子○　北村充史○　鈴木典之○

（順不同、　☆印は地域幹事、○印は新人）

５月の第５回総会で承認されれば、新幹事団が動き出します。４月 27 日、新幹事候補者の初会合が行われ、代表幹事に大山勝美氏を選びました。懸案だった事務局体制強化も新しい体制で実現されるに違いありません。

（総務委員会・野崎茂）

■幹事会速報について

会員の皆様には幹事投票（推薦）、放送人グランプリ投票をお願いしたまま、途中経過の説明、報告が足りず、大変失礼しました。この１年、会報の発行回数を増やすなど会の情報をお伝えする努力はしてきたのですが、幹事会の報告は会報だけではどうしても不十分になってしまいます。これからは、できるだけ定期的に幹事会の報告をお届けしようと思います。これはその第１号です。

といった次第で、５月 11 日（土曜）の総会では新幹事団がスタート、放送人グランプリの表彰式を行います。一人でも多くの会員の方のご参加、ご発言を重ねてお願い申し上げます。

個人情報保護法案と人権擁護法案に反対する決議

個人情報保護法案と人権擁護法案が今国会に上程され、審議が始まった。私たちは、高度情報社会における個人情報の保護と人権救済システムの必要性について、一定の理解をもつものであるが、二法案は憲法で保障された「表現・報道の自由」を著しく侵すものとして強く反対する。

特に個人情報保護法案では、「報道機関」の定義や報道に関する適用除外範囲があいまいのままに、言論・報道機関を監督する立場の主務大臣も置くことになっている。また人権法案では、報道に対する人権侵害が「政府機関としての人権委員会」による特別救済の対象となっており、「人権委員会は報道の自由に十分配慮する」と定められてはいるものの、それを保障する仕組みはなく、公権力の裁量に任されることになる。

このままでは、民主主義の基本である「表現・報道の自由」や国民の「知る権利」に、公権力がメディア規制の意図をもって介入する事態を招きかねない。

私たちは、優れた番組の制作者たちを顕彰する『放送グランプリ賞』を制定し、第一回の受賞者に小さな島の巨大産業廃棄物問題に粘り強く取り組んできた地方民放局の番組制作者を選んだ。今回上程された法案が仮に成立するようなことになれば、この制作者のように行政を告発する番組は制作できなくなり、豊かな放送文化の継承・発展も望めないことは明らかである。

かつて私たちは、公権力によって言論や思想が統制され、自由にものが言えない暗い時代を経験したが、二度とあのような時代に逆戻りさせてはならない。

人権擁護法案にある報道による人権侵害などの問題は、公権力によってではなく報道機関が自主的に解決すべきものである。従って言論・報道機関に不断の自戒、自律が厳しく求められているのは言うまでもない。

放送の現場にかつて携わった者や、現在かかわっている者を中心とする「放送人の会」は、年次総会に当たり、歴史認識を欠いたメディア規制の二法案に反対し、政府と国会に「表現・報道の自由」に十分に配慮した対応を強く求めることを決議する。

2002年5月11日

放送人の会

◇◆◇解説◇◆◇

・『人権擁護法』

日本政府はかねてから国連規約人権委員会に「差別撤廃の法整備」を迫られていた。それに応えたのがこの法案だが、じつは権力のさじ加減ひとつで如何ようにも判断し得る仕掛けになっている。法案中にマスメディアによる人権侵害事項をちゃっかりすべりこませ、労働案件以外の「特別人権侵害」(第45条)で括り、全く次元の異なるものを同列に並べる非常識(それがねらい)な法案になっている。さらに「相当と認める時は、職権で」調停に付す(第42条)という。調停に応じなければ「30万円以下の罰金に処する」(第88条)のだから、法務大臣つまり政府が報道機関などマスメディアに対して自在に圧力をかけられるように保証したのがこの法律である。

・『個人情報保護法』

この法案は本来、今年8月から施行される「改正住民基本台帳法」(国民総背番号制)に備えて、公権力により個人データの流用、乱用から個人のプライバシーを守ることを目的として検討された法案だった。ところが「個人情報とは特定の個人を識別するものと一般化されてしまい、「個人情報取扱事業者」という奇妙なものをでっちあげて、これを取り締まる法律に化けてしまったのである。なるほど第55条に「適用除外」があって放送など報道機関や大学、宗教団体、政治団体などは規定の義務を免れることになっているが、「利用目的を本人に通知、又は公表なくてはならない」(第20～23条)のであれば、ジャーナリズムの調査情報は事実上不可能であり、内部告発など「不正な情報所得」が禁止されるのだから、今日の政財界にびまんする不正と虚偽は完全に隠蔽されることになる。つまりこの法案は、国民の基本的人権を封殺するために用意された「疑惑隠蔽法案」であることはあきらかである。

◇◆◇解説◇◆おわり

＝季旦評＝

放送はアルテ・リーベ

代表幹事　大山勝美

ALTE（アルテ） LIEBE（リーベ）（古い恋人）、横浜の放送番組ライブラリーの建物の一階のレストランの名前です。

放送の歴史がつまっているビルの店の名として、ぴったりです。

3月30日、ライブラリーの9階ホールで、当会主催の対談「東の笑い西の笑い」―滝大作vs澤田隆治―が行われ、内容は濃く面白くて、円熟極上の対談でした。

豊かな体験をふまえての話や現在のお笑い番組への苦言や注文は、満員の参加者の共感と拍手をよんでいました。司会は今野勉氏。

途中休憩のとき、館長の武田光弘氏が話しかけてきました。「さすがというユニークな賞にしましょうよ。意義のある…」と新しく創設された「放送人グランプリ」のことです。4月中旬には決めなくてはならない。第1回は特別賞を含めこの号で発表された方々です。

ビッグ対談が終わったあと、今野氏とともに、ライブラリーの山田さんと「名作の舞台裏」の次年度の内容の打ち合わせに。これまでの「岸辺のアルバム」「夢千代日記」が好評だったので、参加者が満足し意義のある企画を、と欲は深くなります。

田原茂行、鈴木典之両氏は、7月14日に開催を予定している公開シンポジウム「ローカルの智慧は無尽蔵」の懇親会の打ち合わせのためアルテ・リーベへ。この企画は地方で制作されているレギュラー番組をとりあげ、体験を共有し深化させようという期待の新事業なのです。

3月29日には久野浩平氏らと「放送人の証言」のVTRどりを4人一挙に行いました。何とか目標の百人に近づこうと、このところ急ピッチのペースです。

小川秀夫氏はメモを片手に、フジテレビ開局時の忙しさを楽しく熱っぽく、特攻隊の生き残り山本隆則氏はNET開局時の高橋玄洋氏との出逢いをなつかしそうに、荻野慶人氏は映画畑出身者の大阪での汗まみれの苦労話をいきいきと語ってくれました。久野浩平氏のラジオ時代の斬新な試みは、いま聞いてもぞくぞくしてきます。

アルテ・リーベ。放送は皆さんにとって「古い恋人」だと、つくづく実感した一日でした。

メディアにとって「青少年社会環境対策基本法」「個人情報保護法」「人権擁護法」の法案提出は由々しき問題で、すぐにでも関連シンポを開きたい気持ちです。

会は確実に蠢動しています。

5月11日の総会では、新しい顔ぶれの幹事の選出・承認と「放送人グランプリ」の贈呈式もあります。放送に関わり、いまでもアルテ・リーベのように放送を忘れがたく憎からず思ってらっしゃる会員の方々の、一人でも多いご参加とご発言をお待ちする次第です。

会員ミニ情報

◆坂元良江氏がNPOコレクティブハウジング構想をたち上げました。「既成の家族概念、福祉概念、住宅概念にとらわれず」、より自由な暮らしの哲学を模索する人間家族のコア。《松陰コモンズ》は築百五十年の古民家に広大な庭をもち、公と私の場を調整しながら、暮らしの創生をめざす実践。世田谷線松陰神社徒歩3分。皆様の見学歓迎とのこと。

鵠沼海岸から ④

名誉会長　川口幹夫

鵠沼にも春が来た。湘南に吹いて来る風は殊の外暖かになった。

鎌倉山の桜は、ことしも満開で多くの人を楽しませたし、江ノ島にうち寄せる春の波は集まってくるサーファーたちをよろこばせた。

日蓮上人ゆかりの「竜口寺」にもたくさんの人が参詣していた。

春になっての悩みは、三つある。一、気温の上昇に伴い、あれほどくっきり西方にすばらしい姿を見せていた富士山が殆ど見えなくなったこと。二、気候に誘われて湘南を訪れる車がにわかにふえたこと。三、ここを先途と咲き誇る杉の花をはじめとする花粉の飛び方が激しくなって、花粉症に泣く人が急激にふえたこと。私も勿論、その一人である。

車公害、花公害、この二つは時代がもたらしたある種の公害だ。あきらめざるを得ない。富士山がとんと見えなくなったのは淋しいが、これまた「あたたかくなった事」と関係しているのだから、まあよしとしよう。

それやこれやで時代の進歩と人智の進み方のせいが、かえって人間の生き方を変えてしまった。

テレビやラジオだってそうだ。新しいメディアとして人間の生活に大いに役立ってきたはずなのに、今人間の生き方を悪くしていることさえある。マイナスイメージを少しへらすこと、それがどうやら今後の大課題になってきた。

南船北馬

義祖母一〇二歳

金沢　敏子

我が家は4世代6人同居の超高齢家族。筆頭は1900年、明治33年生まれの義祖母かつゑさんで、先日102歳の誕生日を祝った。

かつゑさんは、激動の19世紀から21世紀までの3世紀を今もしっかりと生き続けている気丈な明治の女。人生のお手本というか、生体観察をする孫嫁の私。長寿の秘訣は何かと日常生活をミニDVカメラで追っている。

102歳にもなると、「いつ死んでもいい」というのが彼女の口癖。しかし、心は違う。新聞（読んでいる！）の楽しみはお悔やみ欄。知っている親戚・知人をみつけると、何度も〝あの人死んだがいね〟と、幾分声を弾ませながら言う。生きている自分の喜びを確かめながら、じっと紙面を見つめる姿。ドキッとする。

長寿の源は好奇心。何でも見たい、知りたい、喋りたい、美味しいものを食べてみたい！　因みに好物は鰻と天丼という。

知力、体力、記憶力が衰えてくる高齢者に対して、介護する側に求められているのは〝寛大な心〟。自分がどれだけ優しい人間かが、試されているように思われる。

誰もが避けては通れない老いの道。〝死ぬまで生きていようね〟と家族で見守る、我が家のスーパーウーマンかつゑさんとの暮らし。最期まで家で迎える、心豊かで幸せな死とは何かを考えるこの頃。かつゑさんのカメラスケッチこの春で3年目になる。

（北日本放送）

大阪・ドキュメンタリー

鈴木　昭典

日曜日の午後、関西テレビから、ダミ声のブルースが流れた。もと憂歌団のメンバー、木村充揮クン（48）が、故郷の生野を舞台に強烈な個性を噴出させていた。

月1回最終回に放送される「ザ・ドキュメンタリー」3月24日分の話だが、各系列ともこの種の番組が、深夜に追いやられている中で、日曜の午後帯にローカルで1年間放送を続け、健闘している。

この「ダミ声」をネタに若者たちと話題に花が咲いた。「芸能人の魅力におぶさるだけで、頭も尻もない」という酷評。「生野という土地柄と在日という背景が、木村充揮の原点を浮き立たせている。大阪にしか通じないローカル・ドキュメントだ」「画が面白い。魅力的だ」と絶賛するもの交々。

この番組は、吉本づくしの上方の放送の中で、ドキュメンタリー出身の編成幹部が誕生させたものだが、視聴率が気になる時間だけに芸能ネタという発想だった。とすると仲間ボメも逡巡する。

＊

2001年9月11日のテロをきっかけに、放送業界を直撃した不況の波は、関西もずぶ濡れにしている。4月編成で、私の古巣朝日放送も数本のレギュラーを、経済的理由で消した。

私の社も、ほぼ10年続いた深夜番組が突然休止になり、景気浮揚を願う零細企業のおやじの心がわかる立場になった。

去る3月27日「太平洋戦争の元英国人捕虜」の問題を、賠償請求の判決に合わせて、ニュースステーションで特集した。判決が1年のびて困っていた作品だ。

本番のドキュメンタリーは、4月にローカルで朝日放送から放送される予定だが、制作費不足を東京に助けて貰った訳で、東に足を向けて寝られない。

東阪の経済格差は、8対2と言われるが、東京に本社を移す企業が多い中で、放送よお前もか！という日が来ないことを祈る。電波は地域格差を一瞬にして埋める媒体だが、なぜか私は毎週のように企画を手に東京に通っている。

（ドキュメンタリー工房）

つむじを見せるな

川平　朝清

機会があって、一昨年の4月から昨年の6月までボストンで暮らした。

メディア環境といえば、先ず地元のCATVに月35ドルで加入、NHKテレビジャパンのCS受信装置一式を購入して、月35ドル支出。新聞は地元「ボストングローブ」に「朝日新聞国際衛星版」をとり充分であった。

テレビ番組は、メジャーでも「Survivier」のような覗き趣味系のものが視聴率トップで、一面の荒野の状況。PBS系列のWGBHが、歴史ドキュメンタリーシリーズ〝American Experience〟や科学シリーズ〝Nova〟など次々と見ごたえのある番組で健闘してい

た。

このWGBH、四半期ごとに大々的な募金を行っていた。私も三百ドルで会員になった。

いまやPBSもアンダーライターと称されるスポンサーが番組についており、番組には当然のことながらクレジットがつく。最後に「今番組をご覧になっている、あなたのような視聴者のおかげです。Thank you」とテロップが出るのには良い印象を受けた。

NHKでも「受信料を払ってくださる皆さんのおかげです。ありがとうございます」で番組を結んではどうだろうか。

ボストンで見ていたせいか、異様に感じたのが、日本の場合ではキャスターやコメンテーターで、始めと終わりに深々と頭を下げ、つむじを見せることであった。どうもこれは謝罪しているように見えてしようがなかった。目線を保ったままの会釈でいい。

批評と「放送人の会」

島野　功緒一

六世尾上菊五郎が、「芝居をちっともわからねえ奴が、したり顔で劇評を書きやがる」と言って、批評家物議をかもしたことがある。実作者と評論家の対立は有史いらい数え切れぬほどあって、文壇、演劇、映画の世界には歴史的論争もいくつか残っている。

しかしテレビではきわめて少ない。単に歴史が浅いから、だけではない。テレビ評という分野が、いまだに確立されていないためである。

現在のテレビ評というのは、大学教授とか作家とか、なかにはカツコ付きの文化人が新聞雑誌の依頼に応じて、概ね無難な題材、例えば「NHKスペシャル」などを取り上げるに過ぎない。

それもテーマそのものの批判にとどまり、構成、視角、技術に触れることはほとんどない。つまり芸能ワイド番組の並びコメンテーターの世相論評と、本質的に大差ないのである。

もっと重要なのは、テレビという媒体を愛する批評家がきわめて少ないということ。映画や演劇には〝狂〟のつく批評家が山ほどいた。だがテレビには、愛することはおろか、番組そのものをほとんど見ない〝批評家〟がなんと多いことだろう。

「放送人の会」は制作者と批評家が同居している点が、実に面白い。水と油の寄り合い所帯のようだが、テレビを愛するという一点で結びつけば、これは前例のないユニークな集まりになるのではないか。

放送研究から見えるもの

北川　泰三

昨年、出身局（KBS京都放送）が開局50周年の記念イベントに四条河原町高島屋「サテライトスタジオ」（63年関西初の誕生）を1週間に亘って復活した。32年ぶりとあって、サテスタを懐かしむ市民が連日大勢つめかけた。その模様が新聞に大きく報道され、当時サテスタ番組をも担当していた小生は、新聞社の取材に「ラジオに視覚的要素を持たせることでテレビに対抗しようとした」若き日の胸の内を語った。事実サテスタは「見えるラジオ」と大いに歓迎されたが、やがてマクルーハンが指摘した通り、市民が見慣れるにつれて刺激性を失い（感覚の順応理論）、開設から6年後の69年遂に姿を消した。しかしKBSは、この年UHFテレビを開局。時を同じくして小生もテレビ制作に異動。そこで祇園祭りや時代祭りの「中継放送」に熱中した。

この体験が買われて大学で「テレビ放送論」や「映像文化論」を講じることになったが、放送や映像の研究を重ねるごとに「メディアは人間諸器官の拡張」と言ったマクルーハンの説をより強く実感するようになった。特に、視覚の具体性と迫真性を持つテレビは、映像の繰り返し（反復再生刺激）で人間の感覚を麻痺させ、更なる刺激を求めさせ、遂には「ニュースも娯楽化」させる。この事実はワイドショーの過激報道で見るとおりである。「日本放送芸術協会」で近年小生は教え子（演習生）とともにこの過激表現の理論的根拠を発表したが、この研究の動機は放送人の会主催のシンポジウム「サッチャー報道とは何なのか」（99年7月・渋谷ビデオスタジオ）であった。研究論文は、同学会の論叢『放送芸術学』No15・16・17に「ニュースを娯楽化させる表現手法」と題して連載願っている。放送人諸賢のお眼に止まれば幸甚である。

（京都学園大学助教授）

ミニフリーマーケット

◆『復刻　日本の雑誌』（日本近代文学館編　講談社刊）「明六雑誌」から戦後稀覯雑誌まで　全70冊箱入り美装。1・500円◆世界ノンフィクション全集（筑摩書房刊）全30巻　但ケース無。1・000円（連絡先　松尾羊一）

会員不用品紹介コーナー（例。書籍、家具・置物類、犬猫（血統書付）、但し酒食品や結婚・就職など人類の斡旋は不扱。乞一報編集部。原則　着払い。

……と、思いませんか。

～私論・恣論・試論～（投稿欄）

放送サミットのすすめ　鈴木典之

「放送人の会」は、月一回幹事会を開いていますが、その熱意と討議の充実もさることながら、終わったあとの交歓が楽しい。一寸したサロンの雰囲気です。

会場は近ごろは大抵、地下鉄広尾駅近くの『COREDO』という店。会員の桃井章さん経営のワインバー（前号参照）で、店の好意で夕方の早い時刻に会議を開かせてもらい、終わって開店時間になると、ワリ勘の雑談タイムに移るのです。桃井さんはワインの目利きで、安くてうまいいわくつきのボトルを出してくれるので、気楽に盃も重ねられます。幹事でもない小生などがこの場に加われるのは、〝拡大〟幹事会と称して委員会メンバーにも誘いがかかるお陰で、運営の自在さに小生は一つの夢を託しています。

放送界にサロンの集いを！とかねがね小生は願い、口にも出してきました。単なるOB会ではなく、「個」の顔で主張できる開かれた「場」が必要で、その場がごく自然発生的に「放送人の会」で生まれつつあるのです。

『COREDO』のアットホームな〝店風〟が幹事諸氏をなごませ、いっとき腰を落ち着ける人も増え、年代ものの大テーブル越しに飛び交う情報や議論も盛り上がります。放送を「文化」として捉え直そうと志す人たちの、薀蓄と情熱を傾けてのやりとりですから、知的な興趣に満ちていて、「放送人サロン」の芽はここから育ちはじめていると、小生は秘かに喜んでいます。会の原点もまさにこれだと思います。

昨年から小生は、「放送人の会」のボランティア催事にも参加してますが、的を射た実行力にも驚いています。生きのいいシンポジウムの反響は当然として、過去の名作番組の検証がこんなに一般受けするとは思いも及びませんでした。会場の熱気は回を追うにつれて高まり、これこそが放送の「文化」の掘り起こし作業なのだ、と実感しています。今野勉さんの企画『テレビ・笑いの研究』で、講師の滝大作さん（NHK「お笑いオンステージ」「お江戸でござる」作者）が、今のテレビの笑いの主流を批判し、「テレビが子供を駄目にするのでなく、子供がテレビを駄目にする」という村木良彦さんの名言を引用したときの会場の反応に、小生は胸を打たれました。この『笑いの研究シリーズ』は、このまま番組化し放送させてみたいと思うほどの出来栄えでした。

自意識肥大のわりには足元の弱い放送界も、下支えのボランティア活動と団体はいくつかあります。例えば先達である放送批評懇談会、日本女性放送者懇談会、全日本テレビ番組製作者連盟（ATP）、日本映画テレビプロデューサー協会、ラジオ関連では平成ラジオ塾（主宰・島地純）など研修活動の団体も加えれば、範囲も数も広がります。テーマに差はありますがスタンスは同じです（台所の苦しさも）。

昨年の暮、「文化芸術振興基本法」という、わが国の文化政策上画期的な法律が国会を通ったとき、小生はこれを放送界にあてはめてみて少々不安になりました。所管庁の動きをみていると、この法律は面白い運用が見込めますが、これを生かすシステム、機能する受け皿が放送界にあるでしょうか。

ここで突然、酔余の思いつきですが、既存のボランティア諸団体を結集して『放送サミット』を開催したらどうでしょうか。呼びかけは当「放送への会」がふさわしいでしょう。

なにがでるか、ともかくも、とりあえず顔を合わせて、運営問題などを話し合ってみるのです。

放送界に散在する自発的エネルギーを結集することで、見えてくる地平を夢想したいのです。

迷解放送多頻語事典抜粋

新嘲社刊

見切れ　テレビ創成期は判断ミスでADのバカ面がアップで写り慌てふためく姿や、図体ばかりでかいカメラがモロに画面に入ること。転じて不必要なものを入れ込むこと。（転用例）総指揮、制作統括なる意味不明な存在を指す言葉。

ワタオニ症候群　刷り上がりの台本を見て「どうでもいいけどよ、オレッチのせりふ、長げえなあ。これじゃワタオニ手当を貰わなくちゃ」と怒りフテクサレル症状をいう。ちなみに『渡る世間…』では特に長台詞手当はない由（広報部談）。

パクる　金品をだまし取ること、転じて他人のアイデア、モチーフをかすめ取ること。盗作は犯罪だが、「あのドラマはOOのパクリにしちゃよくできてる」などと言う。もの書き3年、パクリ8年の生き物はむしろ音楽・評論界に多いのが定説。

制作秘書　猫の手も借りたい創成期民放でプロデューサーの電話番や台本配りをした放送局志望の就職浪人のこと。渦中の政策秘書と違い、制作秘書のピンハネどころか私費で飲ませ、仕事を覚えさせたもの。

（蔦蛾蝶）

マイ・オンエアー

『TVゲーム VS TVドラマ』

片岡　敬司

ここ数年、ドラマ演出の傍らゲームソフトの演出をしています。放送人にとってTVゲームは同じモニターを奪い合うライバルですが、敵陣に踏み込むスリルは魅力的で、生来の新しもの好きもあって、いつしか引きずり込まれてしまいました。

私が携わっているのは、ストーリー性の高い戦闘ゲームです。簡単に形式を説明しますと、冒頭に主人公の動機を描くドラマが流れ、戦闘プレイが始まります。一つの戦いが終わるとまたドラマが展開し、主人公を次なる戦闘プレイに導きます。これを繰り返してプレイヤーは正味100時間にわたる壮大な冒険物語を体験する、という仕組みです。

で、演出家は何をするかといいますと、先ずプログラマーが設計したシステムの特徴を理解して、ライターとシナリオを組み上げます。例えば、「一千体のキャラをリアルタイムで制御できるプログラムを開発した」と言われれば、大量の敵をバッタバッタとなぎ倒す快感をウリにしよう、それを肯定できる物語を組もう、となります。

シナリオが上がると、次はデザイナーと組んで絵コンテの作成です。ドラマはオールCGですから現場で芝居を組むわけにはいかず、登場人物の演技はここで決定します。次に、声優さんたちと声の収録。

サラウンド・トラックを先に作り、ドラマのテンポを決めます。人間の動作をデータ化するモーションキャプチャーの演出を終えると、あとは絵コンテをもとに作成される映像にダメを出す作業です。発売日ギリギリまで粘って完成です。

TVドラマと勝手が違うことも多く、困惑する時もありますが、何より苦労するのは役を演じるのが人間ではなく、CGキャラクターだということです。今や本物の人間と見まごうばかりのCGキャラですが、彼らに微妙な演技はまだできません。アクションの制約も多く、あまりの不器用さに演出家は泣かされっぱなしです。それでもプレイヤーは、生身の人間よりもCGキャラを圧倒的に好むのだそうです。

何故でしょう。それは、CGキャラが透き通った心をもつからだと私は推測します。不器用で不自然な彼らの発する言葉は、逆に素直に信じられるのです。彼らの心にベールはかかっておりません。善玉は一点の曇りもなく正義に燃え、悪玉は芯から邪悪で裏がない。よく言えば純粋、悪く言えば単純ですが、このストレートな世界が子供のみならず、20代、30代のプレイヤーたちをも魅了しているのです。

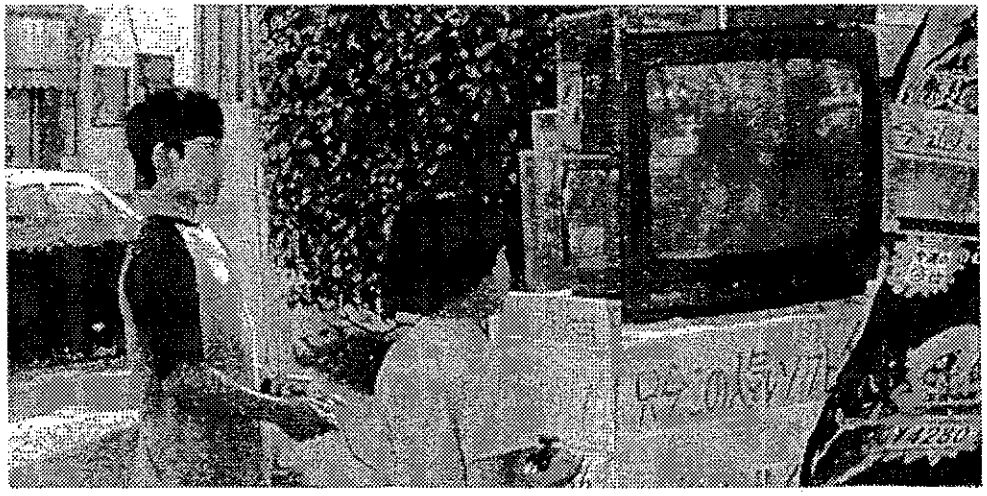
昨年演出したソフトで「感動した」「泣けた」と綴られた感想ハガキを山といただき、私は新鮮な刺激を受けてしまいました。

ドラマの演出家としての私は、人間の多面性、心の機微をどれだけ豊かに描けるかに全力投球しているつもりですが、ひょっとして自分は人間を必要以上に複雑に描き過ぎているのではないか、人間は複雑だからこそ面白いのだけれど、複雑であることそれ自体が目的ではないし、もっと素直にシンプルに生きたいと願う人間は一杯いるじゃないか等々、ゴールのない自問自答の始まりです。

今演出してるゲームは、マイクロソフト社が満を持して発売した最新ゲーム機「XBOX」のソフトです。夏からはまた、「生身の人間」でドラマを演出します。

ゲームが描く人間とドラマが描く人間、両者はこれからも乖離し続けるのでしょうか。ゲームキャラたちに愛と正義と友情を熱く語らせながら、私は相変わらず悶々としているのです。

（NHKドラマ演出家）



写真

巷の電気屋の店先で人気ソフトにハマってるガキたち。ボクたち塾をサボっちゃいかんぞよ！

ラジオ語ルシス

生音・大活躍！　大和定次

私は昭和二十七年にＮＨＫに入局しました。テレビの大河ドラマを初め、ドキュメンタリー、オーディオドラマなど、さまざまな番組の音響効果を担当しました。

そして五十年が経ち、昨年二月に『音作り半世紀～ラジオ・テレビの音響効果』（春秋社）という本を出版しました。多方面から今も種々な反応が続いてます。

定年後、仕事の範囲が広がりました。民放局あるいは、その出身の方々と種々な仕事をしています。

テレビではドキュメンタリー『女性国会議員・一年生』（平成八年・ＮＨＫ）、ドラマスペシャル『おじいさんの台所』（平成九年・テレビ東京）で大山勝美さん、ドキュメンタリー人間劇場『神の島に生きて』（平成十二年・テレビ東京）で堀川とんこうさん。

ラジオではドラマ『サイパンから来た列車』（平成十二年・ニッポン放送）で倉本聡さん。これは今次の大戦で玉砕し、サイパンの海を彷徨っていた日本軍人の英霊が、戦後五十年ぶりに列車に乗って東京に帰ってくるお話です。種々な事件が起こり、過去と現在が交錯し、またサイパンの海へ帰っていきます。その列車は、私が楽器のチューバと昔の井戸ポンプを使って、息や手動で作った「生音」の人間くさい蒸気機関車です。英霊たちの心情を象徴するかのように青息吐息のドラフト音が深夜の東京駅に響いてきます。深いため息をついて停車します。さて私の息ですが、年齢とともに長続きしなくなりました。そこで「デジタルディレー」という加工機器を使って「ポッポッポッ」というドラフト音を長くすることができました。この世では珍しい蒸気機関車の出現です。

ＤＪドラマ『飛行機雲』（平成十年・ＦＭ鹿児島など・芸術祭参加）で監修の上野修さん、ＲＡＢ青森放送のドラマ『ガスミカクモカ』（平成十三年・芸術祭参加）にも加わりました。

ＣＤドラマ『ドンキホーテ』（平成十四年・テアトル・エコー）ではＴＢＳラジオの岩沢敏さん。

これは主人公が巨人と錯覚して戦う、例の「大風車」を創作しなければなりません。試行錯誤の結果、スライド笛で「ヒュー」、シートで「バサバサ」、渋団扇で「パサパサ」、これらの「生音」を上手に加工・積み重ね、最後は「パンポット」でグルグル廻るステレオ感を出し、「リバーブ」を付加してスケールの大きい風車が完成しました。これは大好評でした。このＣＤはこの春に発売予定です。

デジタル時代になり、効果音も実録の現実音と異質な音の世界を模索するようになりました。番組や作品には「もう一つの音のリアリティー」が存在するのです。そこで「生音」が有力な素材として登場してくるわけです。独自の個性・感性を大いに発揮できるジャンルです。新しい加工機器を得て音作りは作品に一層の充実感を与えてゆくことでしょう。

（元ＮＨＫ効果）

◎会費納入のお願い◎

当会は維持会員などというダンナ持ちではなく、独立独歩我が道をゆく会故、ひとへに会員の皆様のふところにすがって運用される会です。なにかの行き違いでまだ未納のままの方々には振り込み用紙を挿入させていただきました。なにとぞご協力お願いいたします。

会員獲得運動にご協力を！

◆放送50年ですが、アノ頃は西も東も分からない「業界」でした。社員も映画会社の録音技師、劇団の演出助手、バンドマン崩れ、ＮＨＫの地方勤務者、学校の教師に潰れた雑誌社編集者などなど。要するに民放は中途採用者が前職の経験と知恵を生かした異業種間交媒の場でした◆他局の同業ディレクターの集まりも活発で、例えば「青年教師の会」では阿部進や無着成恭などに交じってラジオ各局の録音構成の担当者が企画を分担したりもしました。新橋流れ解散派（60年アンポのこと）が録音構成論議で甲論乙駁よく飲みましたっけ。ドラマでも若い詩人や文学者が参入し、様々なエコールが誕生、そのエネルギーは後の新宿ゴールデン街に継承されました◆今の放送界は局もプロダクションもバラバラで、ご時勢なのか現場の交流は少ない。名刺交換のネットワーキングではない、お互いの情報交換による創造力の触発を期待する集まりが求められています◆その受け皿こそ放送人の会のもう一つの役割です。折に触れ接する若い人たちに当会に加入していただくよう語りかけてはいかがでしょう。

中吊広告注目!?!

◆老眼鏡必携的会員著作新刊案内
石井清司「小澤征爾と子供たちへ」1400円 NECメディアプロダクツ）長野冬季五輪M中継の小澤秘話。
松尾羊一「テレビドラマを「読む」」（1800円 メトロポリタン社）。演出家、脚本家、ドラマ好き視聴者必携書

リレー放送現場史

関西ドラマの軌跡

土井原作郎

その昔、テレビ局の花形番組は間違いなくドラマであった。今も変わりはないはずだが、関西では肝心の内容が伴わない。永年にわたって激減してしまっている。時代の推移と共に視聴者の好みが変わってきていることも確かなのだが…。

一九六〇年にはU局を除く在阪のテレビ局は出揃っていた。当時各局は情熱の限りを尽くして競ってドラマ番組を制作していた。芸術祭への参加は勿論のこと、毎年のようにどこかの局が受賞していた。賞をとることが局のイメージアップの最も有効な手段であった。また関西は笑芸の盛んな土地柄、ドラマと並んでコメディー番組も盛んであった。経済の高度成長と連動するかのように、根性ものドラマが持て囃された。大阪お得意の商売ものにとどまらず、五九年の東京オリンピックの影響もあって、スポーツ根性ものも流行した。しかし、各局が大阪色の濃いドラマ作りに力を発揮し続けたのは、十五年ぐらいではなかったか。

大阪人による大阪のための、大阪のドラマと意気がって制作した『現代人間模様』（五九、六〇年・BK）はオール関西勢で注目を集めたが、テレビの台数が急速に伸びたこともあって、全国放送は出演者の知名度が優先され二年で使命を終えた。BK（NHK大阪）は東京への対抗意識が強く、独自枠にこだわってきた。

在阪各局が頑張ってこれたのは、茂木草介・花登筐二人の作家に負うところが大きい。前者は大阪弁のセリフを書いては右に出る者なしといわれ、後者は、筆一本で各局を総ナメにした根性ものの大御所。相次いで亡くなられ、二人をこえる作者が現れなかったことも痛手となった。

六五年以降、東京一局集中が加速していく。その年に始まった『11PM』（大阪発は火、木）などのトークショー番組が安定した視聴率を稼いだことが民放からますますドラマを遠ざけてしまったともいえる。

八四年に雑誌『上方芸能』が各局の編成マンに他局のドラマ番組ベスト5を互選した特集の資料があるが、十八年たった今でも変わりないと思う。題名のみ2作ずつ紹介させていただくと、BKでは『日本の日蝕』『心はいつもラムネ色』、毎日放送は『青春の門』『源氏物語』、朝日放送は『必殺シリーズ』『お荷物小荷物』、関西テレビは『リラックス』『青春の深き淵より』読売テレビは『細うで繁盛記』『親バカ小バカ』。

東京に比して質・量ともに劣る大阪勢は〝はじめに企画ありき〟を合言葉にアイデアで勝負しようと意気込んだ頃のことを懐かしく思い出す。今後ともドラマの量産は夢かもしれないが、文化の地域分散の必要性から言えば、もっともっと頑張ってもらいたいものである。

この三月一杯、和歌山・熊野の風物を巧みに取り入れた朝のテレビ小説『ほんまもん』（BK制作）や、時効寸前の男の苦悩を描いた二時間ドラマ『時効』（朝日放送）など、真正面からの直球勝負で爽やかであった。この四月からテレビ大阪も東京と共同制作を目指して意気が上がってる。やればできるじゃないかの思いを強くする。

しぶとく、粘り強く作り続けることが肝要である。いったん途切れてしまうと復元は至難である。継続は力なり、そして関西は題材の宝庫、まだまだ可能性に満ちている。

（BKを経て現大阪芸術大学教授）

社史、読んでますか？

開局50年、「社史」を編纂した局が目立つ。「放送は放送なんで、出版など邪道だ」という負け惜しみ赤字局もあるが◆ なかでもNHKの『20世紀放送史』は読み物ふうな編集で楽しい大著作なのだが、ケースの重さ全三巻6・2キロ！あまりの重さに耐え兼ねて腰を痛めた◆JTなみに「あなたの健康を損なうおそれがありますので持ち運びに注意しましょう」と扉に注意書が欲しかったほど◆一方『民間放送50年史』（民放連）は民放なのに意外にお堅い。社長室や大学研究室の置物にならない事を切に祈る◆『中部日本放送 50年の歩み』はカラー写真多用のレイアウトが効いた小項目主義。小学生社会科向きかも◆テレビは「絵」だ。それを意識した『TBS50年史』の添付DVDの映像アンソロジーが断然光る。将来の百年史を示唆している◆その昔、中小企業のさる若社長は「新規上場して兜町（証券取引所）の鐘を鳴らすこと、今一つは社業発展の証しの社史を作ること」が私の悲願だと◆「出世はせずともせめて私の名前を社史に載せるよう頑張る」という気概の社員はいるかな。「ケイタイに夢中のそこの新人よ、ヒマなら社史を読め！」と社史編纂室の窓際ベテラン氏は、言って…言っていないか。

某月某日・現場発

《文化発信基地》風飲み屋日記

桃井章

X月X日

深夜、向田邦子賞作家のTさんとワインを飲んでいたら、彼女が「あなた、作家よりこの仕事の方が向いていたわね」と言う。脚本家を廃業して全くゼロから洋風居酒屋を開店して三年半、運良く売上げも右肩上がりで来ている今、彼女の言葉は多分正しいし、素直に喜ぶべきなんだろうけど、ちょっぴり寂しさも感じてしまうのは致し方ないことか？

X月X日

コレドシアター11『あなたが見ている』（作・演出・高谷信之）の開演日。一昨年から始めた店内を使って芝居を公演する試みも漸く定着しつつある。今年は今日を皮切りに演劇人に混じってN・OさんやK・Iさんたちベテランテレビ演出家もウチの店で芝居をやる予定だ。たかが飲み屋の芝居と言うなかれ。客席が四十あれば立派なミニミニシアター、オーバーに言えばオフオフブロードウエイだ。

ウチで初演した作品が、ここで初舞台を踏んだ俳優が、いつの日か下北の小劇場、更に国立劇場でフットライトを浴びる日が来ることを夢見て、今夜も俺はシェーカーを振る。

X月X日

記憶力が年々衰えてきて、名前ばかりか一週間前に来た客の顔まで忘れてしまうくせして、遠い過去のくだらないことを何故か覚えていてゾッとすることがある。

今夜もCXのMプロデューサーと往年の歌番組の話をしていて、ジャニーズ（初代）のメンバーの名前を全員覚えてる自分に呆れ返る。そんなこと覚えてるんだったら代わりに客の女子大生の名前と顔を一人でも多く覚えたらいいのに。

それにしてもどうして彼らの名前を覚えてるんだろうか？ と五五歳になろうとしている時に自分の性にあきれて思い直して見たりする。

X月X日

店に出てみたら放送作家協会のメンバーが、会長のIさんを初めズラリと勢揃い。作家を廃業してから会う機会のなかった懐かしい人々とも会って旧交を温める。

でも、TVを見る時間がなかったり、情報も入ってこないこともあって、以前はかなりの業界通、情報通だったのに、紹介される若い作家はまるで聞いたことのない人ばかり。

三年半ですっかり浦島太郎だ。

X月X日

G・Wに俺が初めてプロデュースするコレドシアターのリハーサル初日。プロデューサーなんかするの初めてなもんだから、俳優がちゃんと集まるのか、演出家、予算のかかるプランを出したりしないか、心配で夕べはあまり眠れなかった。考えれば考えるほど、プロデューサーなんかするんじゃなかったと後悔しきり。でも、集まった若い俳優の顔を見ているうちに、やってよかったと思い直してくる。

それに続々とウチの店で芝居やトークライブ、ミニコンサートをしたいという企画が集まりだしている。別にカルチャーっぽいものをやればいいと言うんじゃないけれど、折角俺がやっているんだから、こんな飲み屋もあっていいんじゃないか？ よーし、こうなったら夢は大きく《文化発信基地》を目指すとしようか？

（シナリオ作家兼『COREDO』主人）

新・会員紹介

（連絡先☎・FAX）

左記の方々に入会していただきました。

◇　◇

・新井和子　03-3491-6409
・石井ふく子　03-3261-2727
・荻野慶人　03-3333-9553
・菅野高至　03-3410-2703
・大和定次　042-388-1032
・山本惠三　052-751-3589
（会＝F　052-259-1344）
・山田尚　045-901-6791
・藪内広之　06-6359-1123
（なお皆様の☎番号はFAX共通です）

編集後記

◆今回は関西の会員に多く寄稿を戴きました。地方会員には日頃隔靴掻痒の思いかと。会報は編集部の恣意で作るものではありません。オレにも言わせろ、書かせろー どしどし事務局宛勝手にFAXしてください◆事務局のワープロのFDはMF2-DO、わが家の同じ「書院」は2HD。すると、こわいかに前者で打った記事を保存にしたら、アッと驚くタメゴロウー 消えてしまった。FDの規格がバラバラなのは何とかならんか◆ひとり勝ちは春先の星野阪神だけではない。いま東京地区でTBSラジオが圧勝中だ。ワイド番組ベスト10では8番組がズラリト並ぶ。「森本毅郎・スタンバイ！」の方が繰り返し映像ばっかしの朝のテレビ情報番組より、はるかに中身は濃い。聴取率争い云々でなく、ラジオは放送界の阪神になれるかなあ。ラジオ関連の情報・記事を寄稿して下さい◆会の性格上、どうしても過去を振り返りがちですが、テレビ・ラジオの今日を問い、明日を考える寸鉄人を刺すコラム「・・・と思いませんか」～私論・恣論・試論～を設けました。カラオケ的ノリで気軽に玉稿、期待。

（編集部・伊藤雅浩・松尾羊一）